





JAPAN
LEATHER
AWARD
2016



GRAND PRIX



グランプリ作品

アンティーク調のデザインが光るメイクアップバッグ。高級感のある金具がエレガントな魅力を引き立てている。マチがたっぷりあるので、多めの荷物も収納可。内側にはポケットや鏡があり機能的だ

Japan Leather Award 2016 グランプリ



グランプリ

宮瀬 彩加
個人

女性の気持ちを躍動させる
機能的なメイクアップバッグ

「え？ ホントに？」

レディースバッグ部門の受賞者として会場にいた宮瀬彩加さんは、自身の作品がグランプリとして発表された瞬間について、「驚いて頭が追いつかなかった」と述懐する。

「その後、少しずつ喜びがこみあげてきて。壇上でドン小西さんからトロフィーと花束を受け取ったときは、自然と涙が出ました」

モデル・タレントとして活躍し、杉野服飾大学の卒業生でもある宮瀬さん。じつは昨年も、同大学の生徒として『ジャパン・レザー・アワード』に出品している。コンセプトは「女性のモチベーションが高まるメイクアップバッグ」だった。

「私はたくさんコンプレックスがありますが、メイクで自信を持った部分が本当に大きくて。女性のテンションを上げる、機能的で実用性の高い革のメイクアップバッグを作ろうと思いました」だが、その完成度は「イマイチでした」。コンパクトに作ることを意識しすぎたあまり、内側に取付けた鏡が見えにくくなるなど、使い勝手に少々難があった。

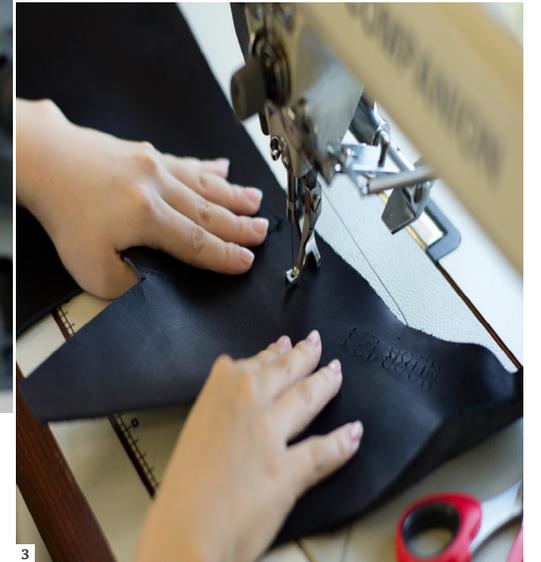
卒業制作となった今年のプロダクト、コンセプトは踏襲しつつ、機能面の改善を重視した。授業で作品のプレゼンをした際には、先生から愛情ゆ



1



2



3

1.卒業した後も、モデル・タレント活動の合間を縫って杉野服飾大学に来るといふ宮瀬さん。「一人黙々と作業をする時間が好きです」。2.革の好きなポイントは、高級感と気品。3.皮革用のミシンを使い始めたのは大学に入学してから。「普通のミシンと違って馬力がすごいです！」

レディースバッグ部門



※2位

石黒 秀一郎
個人



※3位

蓬田 愛里沙
(有)松岡商店



えの厳しい言葉をかけられ、「学校近くの目黒川を見ながら、泣いてしまいました」。

そこで負けず嫌いな性格に火が付き、制作に集中して打ち込んだ。鏡を見えやすくし、メイク筆を入れる収納ポケットのサイズも入念に計算した。無心になって作ったバッグに、確かな手ごたえを感じた。結果は、堂々のグランプリ受賞。悔し涙を嬉し涙に変えることができた。

そんな宮瀬さんの夢は、モデル・タレントとしてバッグをプロデュースすることだ。

「ファッションは大好きだし、革を使って高級感のあるバッグを作るのも好き。でも、その個性は、すべてタレント活動につなげたい。いつか自分のブランドを立ち上げたいです！」

部門賞

WINNERS

レディースフットウェア部門

滑らかな質感のレザーに、熱帯雨林に生息する動物のUVプリントを施して情熱的な雰囲気演出。ヒールには立体的な蛇モチーフを巻き付け、インパクトのある一足に仕上げた。「革が滑らかすぎると色の乗りが良くなるなど、理想に辿り着くまで試行錯誤を重ねました」



倉田 彩加
神戸レザークロス(株)



+2位
吉田 真也
靴工房 ハンザワ



+3位
古屋 佑磨
UMAFULLER

ファッション雑貨部門

ムラのあるダークブラウンの色合いに加え、ハードなシボが入った馬革を厳選し、高級感のなかにもこなれ感のある風合いを演出。ハイネックにすることで、着用時に美しいシルエットになるよう工夫した点も注目したい。「かつてないレザージャケットを目指しながら作りました!」



石橋 善彦
(有)オベリスク



+2位
櫻井 和重
(株)アルテック・ラボ



+3位
鈴木 賢
(株)アルテック・ラボ

メンズフットウェア部門

ゴールドのパテントレザーとブラックのシュリンクレザーのコンビによってハープを表現。靴底にもレザーを使用し、ほぼハンドメイドで制作するなど、こだわりと愛情を感じる一足に。「アッパーにある弦部分は、ギャザーのあるゴムに革を張って立体感を生み出しました」



吉田 遼平
個人



+2位
大平 麻理恵
個人



+3位
小林 幸司
大塚製靴(株)

生活雑貨部門

藍染めに、正面のバイソン革の部分は朱色の漆で彩るなど、日本の美しい自然や美意識を表現した2ピースポーチ。内蔵するポーチの持ち手が露出し、ハンドルが3本に見えるデザインが印象的。「マチがインポーチを巻き込む構造にし持ち手がズレないように工夫しています」



野沢 浩道
個人



+2位
宇津木 仁
(株)猪瀬



+3位
高田 佳治
個人

メンズバッグ部門

ソフトレザーに弾力のあるネオプレーン素材を張り合わせ、独特のボリューム感とタッチ感を与えた。付属にはロウ引きの革を使い要所を引き締め経年変化が楽しめるように。「布帛のバッグを多く手掛けていますが、今回の制作が今後の仕事に活かせそうです」

 小林 剛
(株)吉田



+ 2位
中村 忠裕
(有)ジェイクラフトマン



+ 3位
矢内 徹
(株)吉田

学生部門

“暮らしのなかに溶け込むバッグ”がコンセプト。口を開けば自立し、モダンなインテリアとしても成立する流線型の形状は、ロシアのシュプレマティズムの絵画を参考にしたとか。「長く使えるように、飽きのこないデザインを意識しました」

 伊藤 依莉亜
杉野服飾大学



+ 2位
茂木 陸
杉野服飾大学



+ 3位
直井 愛実
杉野服飾大学

ゲスト審査員賞

冠（かぶせ）には一枚革、表面には洗みのある革を使用しクラシカルに仕上げたランドセル。背面にはオレンジを配し女性にも持ちやすい工夫をした。デザインだけでなく大人の使い勝手の良さを構造上でも実現。「荷物収納時も重さを感じにくい構造を考えました」

 辻野 孝太郎
(株)クロスライン



厳しい審査を勝ち抜いたレザープロダクトの頂点が決まる！

今年で9年目を迎える『ジャパン・レザー・アワード』の表彰式が、2016年11月に阪急うめだ本店で開催された。東京藝術大学教授 菅野健一審査員長をはじめ、ゲスト審査員も務めたドン小西氏がプレゼンターとして登場。1次、2次審査をクリアした8名の受賞者たちも、緊張と期待が入り混じる面持ちで発表を待った。各部門

賞に続き、見事グランプリの栄冠に輝いたのは弱冠23歳の宮瀬彩加さんだった。菅野審査員長の総評「遊び心のある作品が多く、“つくる”ことの楽しさを感じさせられた」のコメントの通り、例年以上に新しい発想、エネルギーを感じさせた表彰式。レザー業界の明るい未来を感じさせるには十分な内容であった。

日本最大のレザープロダクトコンペティション

今回のジャパン・レザー・アワードは2段階審査を採用。審査基準は「素材×デザイン×ファッション=∞」をコンセプトとした天然皮革素材を生かしたプロダクトであること。合計279点のエントリー作品を菅野健一審査員長、またゲスト審査員であるドン小西氏をはじめとした

プロ審査員、さらには一般ユーザーも加わり、大阪、東京の2つの会場で審査を行った。また、作品応募者と皮革業界の関係者がコミュニケーションできる場を提供するなど、審査会自体が新たなレザームーブメントを生みだすきっかけとなった。



1次審査は大阪「阪急うめだ本店」。審査員長、ゲスト審査員に加え、阪急うめだ本店の来店客150名が審査・採点。実際の購入者となる一般ユーザー目線の評価がリアルに反映された

2次審査の舞台は東京「マーチエキュート神田万世橋」。1次審査を通過した100作品が集合。10名のプロ審査員が時間をかけ、1点1点吟味し、各部門賞、そしてグランプリを選出した

Japan Leather Award 2016

award.jlia.or.jp/2016

受賞作品展示

受賞作品は下記の日程で阪急うめだ本店で展示されます。ぜひ、実際に見て、触れて、革の魅力を感じてください。



大阪・梅田 1月25日(水)～31日(火) (2017年)

阪急うめだ本店

住所：大阪府大阪市北区角田町8-7 開催場所：10階 うめだスク中央街区
<http://www.hankyu-dept.co.jp>



一般社団法人 日本皮革産業連合会 (JLIA)
JAPAN LEATHER AND LEATHER GOODS INDUSTRIES ASSOCIATION

www.jlia.or.jp